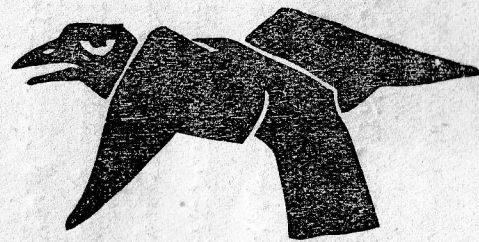


お波

水野 仙子



捨吉は今朝起きぬけに伊助を連れて山へ行つた。擔いだ鍬の先に緒の切れた下駄をぶらさげて、裸足に長裾の伊助を先に、片手には粘土や芝生を入れたバケツ、片つ方には桐の葉で根を包んだ小松などを下げて氣忙しさうに歸つて來た。

「あゝ腹がへつた／＼あつ母さ！」と伊助は足も洗はずに騒ぎ立てる。朝の光りに馴れた目は、三方壁の檐のひくい家に入つて、一寸まごついた。佛壇の暗さに、濕めすのを忘れた豆ランプが、ぼつちりと赤くなつて居る。二隅だけ外した色の襪めた蚊帳の中から、今起きたしたお鶴が、腹掛一つてひよろ／＼しながら鼻を鳴らして居る。それに着物を着

せようと、逃げるのを追ひかけてお糸は喚く。赤んぼは腹ん這ひになつて、両手でそこらのものを掻き散らしながら、枯れた泣きようをして人を呼んで居る。

「ちよッ」と思はず舌打ちが出た。

「いつまで何愚圖々々してやがるんだ！」と怒鳴らうとした、がふとやめた。

「どうしたんだ？」

お波はそこに、足許に箒を投げ出したまゝ、鼻を兩手で抑へて立つて居る。

「鼻血が……」

捨吉はそのまゝ黙つて顔洗ひに井戸端へ行つた。

背戸の井戸をはさんで並んだ三軒の長家には、粘土の竈にかけた鍋から盛に湯氣が立つて、夏蠶の糸をとる女房達が、壁越しに大きな聲で話し合つて居る。杵の音がかたみに纏れ合つて律を刻んだ。

「あい／＼大がいにして片付けつちまアねか、おきんさ達アはあ一鍋終へる頃だぞ」

鼻に紙の振をかつて、眞つ赤な顔をして居るお波を圍んで、朝からお鶴は錢を強請る。叱る、泣き出す。一遊びして歸つた源吉は、伊助が朝飯を喰べてゐるのを見て、腹が空いたとぶす／＼言ひ出す。

「やかましい童どもだなア、馬鹿、何處の國に朝飯を二ん度喰ふ奴がある！ お鶴、源吉、ぶつ叩くぞ朝からやぶれてつと。飯喰つた奴アさつさと學校さ行げ！ 今日はいつぽど遅いんだぞ」

手盛て麥飯を掻き込みながら、箒を持ちあげて捨吉は怒鳴つた。

「ほんとに／＼のぼせあがつちまア、どうしてかう煩さい子供達だか……」とお波は大儀さうに溜息をして蒲團をたゝみはじめた。

「あゝあ、年中かうして子供にばかり責められてんだ、こんな因果な體もねえもんだ」と聞えよがしに獨り言を言つた。

捨吉はあゝしてかうしてと、仕事の手順を考へて居た矢先、のび／＼とした心が不意に躓いて、腹立たしいやうな氣持ちがしたが、腹がふくれるとまた暢氣になつて、鼻聲にさほりを唸りながら仕事にかゝつた。

捨吉はこの裏町へ越して來てからそれでも五年になる。はじめは隣近所の人達に、月の明るい晩などは、殊に首を締められる鶏の叫びが、何とも言へず厭な氣持ちをさせたものだが、捨さんと言へば直ぐにその義太夫を聯想するだけ、今では四邊の人達に、在つても無くていい人になつて居る。たゞ六つになる源吉が大の腕白者で、毎日のやうに近所の女房達に苦情を申し込まれて居る。

趣して來た當時は少しは綺麗にもして、賣り出しの廣告の赤い字が勢ひのいゝ時もあつたが、おひ／＼新しい立派な肉屋が殖え、調子に乗つて手を擴げた養豚が、その年ぐいとコレラのために撲殺するやうなはめになつて、青くなつたほどの大痛棒おほいたてをうけた。それからこつちはいくら焦慮つてもどうも思ふやうに行かない。子供は殖える。不景氣が続く。雨が漏つて納戸の蒲團が腐るやうなことがあつても、屋賃が滞つて居るので屋根替へもして貰へないやうな始末、この頃は太分氣が太くなつて、何事に

もどうにでもなれといふやうな遣り口が見えた。

何肉に限らず、暑さに向つて來るに隨つて捌けなくなるのが常である。それで捨吉も一昨年からは毎年氷水屋になつた。

二三日前に問屋から、氷倉の開いた通知しらせが來たので、昨日から鶏屋とを片づけるやら何やらで、新らしい仕事をする時はいつもさうで、捨吉は機嫌よく働いて居る。

「これようお聞き遊ばせや、今お館には惡人瀾り、お近習小性に至るまで、ちつとも油斷はなりませぬ……」

十八番の政岡が今日もまた初まつた。首を振つたり口を歪めたりしてゐる様を見ると、お波はいつも男は暢氣だと思つて、それが妬ましく口惜しく憎らしくなる。欲しいとも生まうとも思つて居ないところへ子供が生れる。有つ、また生れる。さうして年が年中その泣き聲に縛りつけられて、ほつとする隙もない。せめて活計でも満足にゆくことか、妹の縁づき先へ借金は殖えるばかり、それすらこの頃は何か彼とか甘い斷りを喰ふやうになつた。

子供をどうしようと思ふ。どうなるんだらうと思ふ。この頃そんなことを考へるやうになつて、その度に心が重くなつた。生んだ以上はそつちのものと云はぬばかりの顔つきする男、少くも子供といふものを餘外になし得る男、女ばかりが知る直接の苦痛に没交渉な男、その男といふものがむちやに腹立たしい。子供といふ大切な寶の重い葛籠を背負せられた不平が、重いと思ふ時だけ背負せた人が憎くなる。

愛も戀もない男と女、それが長年同棲して、結果の敗北に泣く時だけ女は悔いる。それも瞬間、悔いても及ばないと知つてゐるから我儘をはじめ出す。甘へてみる。自墮落にもして見る。ふとそれらが氣耻しくなつては今度は獨り焦れ出して来る。それを度々繰りかへしてゆくうちには、初めはさすがに包まれて居た待ち設けない喜びといふやうなものが消えてしまつて、今度は責任の重さだけが際だつて感じられる。

お波には無論自分の心を順序だつて考へることが出来なかつたが——考へようとしな——たゞ時々むしやくしやとなつて人に當り散らした。そしては氣の弱い女だけに後では一倍滅入り込む。今日は一日赤い顔をして黙つて仕事をして居た。常から赤い顔をしてゐる時はさうなので、捨吉は別段氣にもかけず終日庭いぢりに暮した。

二

鶏屋は兎に角一角の水氷屋になつた。

小さいながらセメンで塗つた池なども一寸器用に出来て、浅い水を金魚の背がすい／＼と分けて歩いた。腰掛には花奠座を敷く。硝子の籠をさげる。棚には澤山果實水やサイダの空罎などを買つて來て飾つた。そんなものにすら思つたより資本が要つたが、どうにかかうにか工風して、早速珍らしさうに一錢位を持つて來る子供等を對手に氷をかいだ。

或る日捨吉は店の床儿に裸足の足を組み合せて、玉垂れの風に擦れ合ふ音を聞きながら煙草を吸つて

居ると、鼻聲でわい／＼言つて居た子供達が、急にわつと大きな聲をあげて泣き出した。同時にお波の肝走つた叱り聲で、器を投げつけた音に續いて、驚いたやうに赤兒も泣き出した。

「ちよッ」と舌打ちしながら、捨吉はひそ／＼と起つて行つて暖簾を分けて首を出した。

「どうしたんだ?……あゝん?」

お波は大人氣もなく、袂を顔にあてゝひん／＼と泣いて居る。

「こんな煩せい餓鬼どもつてねえもんだ、畜生! 馬鹿! 何處へても行つちまへやがれ!」

頬のこけた青い顔に血を漂はしてぶる／＼慄へて居る。

「手前此頃あぼせてるな、馬鹿!」

捨吉は一寸可哀いさうにも思つた。

「源吉、いつまでも吠えてねえてさつと遊びに行つてこ、あつるを連れてくんだぞ、いゝか、そら!」

吃驚したやうに母親の顔を眺めて、聲でばかり泣いて居る。そつと捨吉は賣溜めの竹筒から、五厘づゝ出して持たせてやつた。

「仕様がねえなアほんに、子供のこつて眞つ向になつて怒つてどうしんだ」と忌々しさに言ひかけたが、ふつとある不安が萌して、

「手前この頃のぼせてんだぞ、鼻血がよくてんでねえか」

茶碗や箸などが轉けて居る板の間に立つて、お波はまだ嘔り泣いて居る。

此頃なんとも麥のほひがけい／＼かへして來て咽喉へ通らないので、今日は自分だけの土鍋に少し白く炊いた。それを子供等が珍らしがつて、奪ひ合つて喰べようとしたのが、情なく思々しかつたからである。子供が可哀いさうでもあり、腹たゞしくもあり、泣いてみれば何が何やら悲しくなつて、脱ぎ捨ての押しかためられた壁の隅へ行つてお波は背を向けた。

捨吉は泣きながら其方へ這つて行かうとする留吉を抱へてすかしながら裏へ出た。

「ない捨さん、明日藥師様のお縁日に義太夫があるつていふから捨さんも出たらよかつばい、腹かへつてもひもじうないか、よつてゐてん／＼」

端の長家の肥つた若い女が聲をかけて、手際よく繭をつけながら、退屈凌ぎにげら／＼笑つた。

お波は二時頃、珍らしくお袋の墓へおまゐりして來ると言つて、留吉を背負つて家を出た。

日暮方になつても歸つて來ないので、庭掃きや何かを伊助に言ひ付けて、なんののかと纏はる子供等を叱りつけながら、捨吉はごそ／＼と臺所のことをやつて居た。やがて、

「あゝ暗い／＼」といふお波の聲が聞えて、

「歸つて來た／＼」とそこらに居た子供達が、猫の子のやうにお波を取り卷いた。

「何處かへ寄つたのか？」と捨吉は煮えだつた鍋を下す途端に熱くした手を、耳へやりながら穩やかな聲をかけた。

「えゝおせい家さえ」と投げやるやうな返事、風呂敷から新聞紙の袋を出して、穴のある煎瓶を二枚つゝ子供らに分けた。

捨吉はぐつと癪に障つたが、今朝のことを思ひ出して怒鳴るのを控へた。

「お糸、お膳を出せ／＼、さア飯だ／＼」

伊助はそのひまに店の提灯へすつかり灯を入れた。雨が過ぎたあとの風が、風鈴の短冊を面白さうに弄んで居る。せまい四疊の勝手には紙笠の垂んだ洋燈がつけられて、汁を吸る音が一頻り騒々しくなる。腹が空かないと言つて、其傍で黒繻子と綿繻珍の合せ帯をたゝみながら、お波はきつと口を結んで居たが、其汁を吸る音や、びちや／＼する唇の音やが、何とも言へず耳に障つて眉を顰めた。

「ちよつ」と舌打ちして、あ惡るかつたなと幽に思つたが、どうにもかうにもその音が癪に障る。厭なものを追かけ／＼聞かされるやうで、果ては耳を蔽ふてうつぶしてしまつた。

その横顔を時々ぢろり／＼と見て居た捨吉も、怪訝さうな目をして二人を見くらべて居た伊助も、申し合せてやうに一寸箸の手をとめた。

「あゝあ、いつまでもかう涼しくつちやアやり切れねえなア」

欠伸まぢりに着物を脱いで、捨吉は勢よく蚊帳の面を捲くつた時、

「…………どうなつたつて大きなお世話だ…………」

不意と切つたやうにお波の慄へ聲がした。ぎよつとして思はず、
「お波！」と呼んだ。

目の下にお波は、留吉を抱へて仰向けに天井を見つめて居る。其日が、枕を軋ませてこつちを向いたの
で、やゝ安堵して、

「お波、何寢惚けてんだ——」とは言つたが、睡つたのでないことは其目で知れる。

「なアお波、さア寢ろく、いゝか洋燈を消すぞ」

「世の中に寢る程樂なことはないか、やれく」と附元氣をして捨吉は蒲團をかけた。

「あゝあつ」と出もしない欠伸をわざと大きくして、それからそつと傍を窺ふた。静まりかへつた間は
何處にも動く影をゆるさない。まだ天井に目を据ゑてゐるのだなと、なんとはなしにさう思つた。

いつとはなしにうとくとなりかけた時、

「なんだつて大きな面しやがつて……ねえ貴方、あれんばかりの借金さつさと返してしまひなんしよ
よ、あれんばかり……大きな面しやがつて……」と聲は低かつたがはつきり聞えた。

「お波！ 手前何いつてゐるんだ、今日おせいと喧嘩でもして來たのか」と半ば身を起しかけたが、

「借金なんてそんなに苦にしなかつていゝわな、僅ばかり……返される時になりやいつだつてかへ
されんだ」と調子を替へた。

「そんなこと考へてねえて早く眠れく、そろそろ一時打つたんだぞ」

そのまゝ静になつた。

伊助の時には産が重くて、そのあがりとはほんとしたやうになり、妙なことを走るやうなことがあつ
た。其當時、死んだ母親が御祈禱をあげたり何かしたことを思ひ出して、捨吉はなか／＼寢つかれなかつた。伊助が子供に似合はず大人で、なか／＼役に立つて、學校の出來のいゝことなども考へて、何だ
かかう妙に哀れつぽくなつたと思つた。

曉近くにふと目を覺まして見ると、お波はすやく／＼と鼻息を立てゝ居た。

三

あくる日、お波は當り前に起きて當り前に仕事をした。朝飯の時、

「昨宵は面白い夢を見たく」と繰り返してゐるので、どんな夢だと聞くと、

「私が十八位の綺麗な娘になつて……」とあとは言はずにさも嬉しさうに笑つて居る。馬鹿々々しい
と思つたから、捨吉は對手にならずにそのまゝ店へ出て居ると、程過ぎてから頻りに「貴君、貴君」と
呼んでゐる。

「何んだ？」と稍々面倒臭さうに顔を出すと、

「おせい家の借金ほどの位なんだつけない」と聞く。

「また初めやがつた！ 心配しんなつうにな、十兩々々」と出鱈目を言つて首をひつ込めた。それでも氣
になるのでやがてそつと覗いてみると、お波は長火鉢の前に坐つて、一心に何か考へ込んで居た。

昨日お寺へ行つた時にこんなことがあつた。途中から泣き出した留吉を、ほら鳩が／＼と本堂の屋根を指さして立ち止つて居ると、ふと足音がしたので振りかへつて見た。お波は思はず眞つ赤になつた。今度の住持は年が若くて、そして綺麗な坊様だといふことをちよい／＼耳にして居る。それだなど知つた時に、自分が眞つ赤になつたのに氣付いて、はつとして猶更眞つ赤になつた。お波は逃げるやうにさつさと歩き出した。さうして怖々ふりかへつて見ると、裾長く着た白い着物の帯に兩手をはさんで、青々とした形のいゝ頭の人が、ぶら／＼と静かに向ふへ行く。はつと安心したが何故かもの足らなかつた。門を曲る時に引かれるやうにまた振りかへつて見たが、何にしてもこの年になつて、男の前に面を赤めたのを恥かしいことと思ひつゞけた。見すばらしい自分の姿を見廻して、これまでにない佗びしさを覺えた。

途中からふと妹の家へ寄る氣になつて、わざ／＼道を迂曲つた。可なり大きな米穀店であるけれども、まだ頑丈な姑がやかましいので、妹は小さくなつて働いて居る。その姑に大きな顔されても仕方がないやうに借金はあり、妹のおど／＼した様を見るのが癪だつたり、さればといつて互に勞はり合つて居る妹夫婦を見ては、吾が身に引き較べて妬ましかつたりして、お波には常から國の高い家であつた。丁度その日は姑が三日ばかり前に湯治に行つたといふあとで、妹が嫁に來て以來、はじめて落ちついてゐる／＼な話をした。姑が居なければ自然さうなるので、今日は何かにつけ主婦ぶつて欺待する。と思つてみるとそれが面憎くなり、夫婦でちやほやするのが、こつちを見縊つてゐるのだなといふやうに解される。

毫碌して三年間といふもの、人のいゝ笑ひの種になつて居た祖母の話などが出て、久し振りに笑つたりしたが、やがておせいが聲をひそめて、

「姉さ、あんたまた出來たない」と言はれた時、お波は穴にも這入りたい程恥かしいと思つた。自分も今度ばかりは實際思ひがけなかつた。

「ほんとに子供ばかり殖えて大ていぢやない」とあり／＼困つたといふ顔付が見える。困れば困るだけ自分の方にも自然と浪が及ぼして來るからである。おせいにはまだ一人も子供がないから、幾分か嘲ける氣味も含まれて居る。

恥かしいと思つて居た矢先だから、お波には轟と應へて、同時にぐつと癪に障つた。どうしてくれようと思ふほど腹が立つて、意固地な厭味を散々並べ立て、ぶいと暇を告げて歸つた。

その歸途にまたふら／＼とお寺の前まで行つた。ふと立ち止まつて考へたが、何が何して何しにこゝまで戻つたのか解らなかつた。やがてすた／＼と引きかへした。

二三日過ぎてから、此間の容子が少し變だつたので、おせいは心配して來て見たが、その時お波は長火鉢の脇に立て膝になつて、前掛の紐を結んでは解き、解いては結び、氣をそれにばかり打ち込んだやうに、一心になつて繰りかへして居た。泣聲になつて、

「姉さ、あんたはまアなんて情けない、あんたが確りしてくれなくちゃ、子供達をどうする積りなんだい」疑乎と見つめられた目を事もなくみかへして、

「あせう、そりやい、男だぞ」と言つた。

男を選び好みする心の自由さへも持たなかつた女が、妻となり、いつの間にか母となり、醜い男に不満足を感じる感情あるのを知る餘裕はなかつた。義理だの道徳だの、そんな生れたまゝの心を包む皮を脱いで、お波は今こそ好きなものを好く自由を得たのだ。

或る晩お波はふつと刎ね起きた。四邊の闇に耳をすまして、寢過したなと思ふと氣が焦立つ。さぞ待つて居やう、或は途中まで迎へに出て居るかも知れない、とさう思つて手早く着物を着た。手探りに這つて來て框から庭へ下りる。下駄は音するからと思つて裸足になつた。音がしないやうにと表の戸をこびあける。庭の隅の鶏屋の中で鶏がコ、コ、とないた。かへり戸を忘れて歩き出したが、ふと戻つて來て戸を閉めた。一間ばかり歩いてまた戻つた。ひとりてにすると音もなく開いたやうな氣がしたので、今度は下締めもない着物の褌をとつて、ひた／＼と足早やに急ぎ出した。

静まりかへつた寺の庭をうろ／＼して居たお波は、やがて芭蕉の葉の下をくぐつて、庫裡の板戸を割れるやうに叩き出した。

四

「やアい狂者々々、鶏屋の色狂者！」

「面白いから行つて見る、また必とお寺さ行くぞ」

學校がへりの子供らがぞろ／＼と蹤いて行く。

「そらまた鶏屋のお波さんがお通りだ、あれ！ 今日はお白粉なんぞつけ出したぞ。どんな氣で居るもんだかねえ、明蓮寺の方丈様もとんだ者に見込まれたもんだ、あれにかゝつちや、はあ往生だねえ」

店に居た内儀さん達が見送つて笑つた。

お波は時々ふいと家を出る。いつもお寺のあたりをうろ／＼して、子供らに袂を引つぱられたり、石を投げつけられたりして居る。やがて何も彼もけろりと忘れてしまつたやうに歸つて來る。さもなければ従いて出た伊助に途中から連れかへされる。時々は何處からともなしに干物をはづして來て、捨吉を困らせた。

八月末からはそろ／＼秋風が吹きそめて店も隙になるので、九月初旬からまた鶏屋にかへる。捨吉は何も彼も思ふやうに行かないのと、お波に對する不平から、此頃は少し自棄氣味になつて、賣り溜めをつかみ出して赤い顔をして歸つて來る時がある。それでも學校まで止させてしまつた伊助が、くる／＼家の用をしてるのを見ると、氣恥かしくなつてもうこを行くまいなど、其時だけは思ふ。子供はこの頃つく／＼可愛いと思ふやうになつた。

今ではお絲一人だけが學校へ行つて居る。十一月三日の朝、捨吉は自分から髪を束ねてやつて、心覺えの簞笥から晴着を引きずり出して着せた。何しろ育ち盛りの子供であるから、行きも丈けも短くなつて居て、思はず、

「ちよまよのやうだなア」と吹き出したが、仕方がないので、

「さアよし、手をちよこませるやうにして行げよ」と出してやつた。お絲はそれでも駄々もこねず出て行くのを見送つて、

「ちよんで行げよ」とまた聲をかけた。

お波は此節少しおとなしくなつて、幾日も／＼櫛の齒を入れない髪を蓬々とさせて、家に閉ぢ籠つて居る。折り屈みも苦しうな腹をして、男は薄情だ／＼と言つて居る。

「何故？」と聞くと、

「こんな體の私を置いてあの人は何處かへ行つてしまつた」といふ。

「あの人が誰だ？」と聞くと今度は黙つてしまふ。氣違ひだとは思ひながら、捨吉は忌々しくなつて、「糞！」といふやうな氣になる。「子、俺の子でねえかも知れねえよ」とこんなことも思つて見た。しかしさう思つたところで、そんな馬鹿なことを言つて喧嘩をすることも出来ない。それよりも、この頃ふと關係をつけてしまつた近所の魚屋の肥つた飯炊き——少し足りない女——が、あいつ懷妊でもしなけりやいゝが」などゝそんなことを心配した。

その年は兎も角も無事に暮れた。すると正月の七日八日の二日續けて、町のもの好き連が集つて、常舞臺を借りて素人義太夫の催しがあつた。無論捨吉も加はつて居る。木戸錢なし、下足料一錢といふ、赤い圈點まじりのついたビラが茶屋や床屋に下つて、午後から太鼓の音が町中を觸れて歩いた。その日捨吉は、夕方から飯を早くして出掛けて行つた。

家には十二といふ年の割に氣も體も利く伊助が、早くから店の戸をしめて、妹どもを集めて炬燵にあつて居た。

材木屋の裏の松に當る風の音が、ゴウーッ／＼といふ響を送つて、時折隙間を偷んで透入る風が、氣味わるく隔ての障戸を押したり引いたりして居る。罕れに通る人の足音が高く響いた。源吉とおつるはいつか兩手を高くひらいて寢入つて居る。きい／＼する聲をたてながら、綾の取りつこをして居たお糸が、あゝと欠伸をしてはたりと仰向けにひつくりかへる。それが傳染つて伊助も思はず大きな欠伸をした。

向ふ側の蒲團に顔を伏せて、眠つたのかと思へばさうでもなく、頻りに首をかへして居たお波は、此時「むゝ……むゝ……」と重苦しく唸り出した。びっくりとして見守つて居ると、やがてまた靜になる。程過ぎてからふつと顔をあげた。子供らの顔をづらりと見廻して、眉を擧めて深い息をつく。

「腹が痛いのか？ おつ母さ」

當惑したやうな伊助の顔を、お波は見定めるやうに上づつた眸を据えた。尾を引いて来たやうに我が子の顔が甦つて、何故かその顔のこゝにあるのが不思議なやうな感じがした。

陣痛が／＼増してくるらしいので、子供心に伊助は殆ど途方に暮れたが、やがて襟巻をとつてあとに氣を残しながら家を出た。舞臺へ行かうか、叔母の家へ行かうかと一寸迷つたが、少しでも近い方へと思つてまづ叔母の家へ急いだ。緒のゆるんだ下駄が踵をはなれて、あとから追ひかけるものがあるやうに氣味悪く響いた。

黒い頭巾で顔を包んで、肩掛けにくるまつて出て来たおせい、途中から伊助を千樂座へやつた。心

も空に來てみると、目を覺まして好きな伊助が居ないので、「兄^{あに}ちやア〜」と泣いて居るお鶴を、お糸は持てあまして自分も泣きさうになつて居た。

肝腎のお波は、痛さに堪へられぬやう、満面に朱を滌いて、着物の前を亂して、そこらをぐる〜立ち廻つて居る。淺猿しさと情なさがこみあげて、

「姉さ〜」と泣き聲になつた。

「おせい」かとお波は立ち止まつた。凄^{こわ}い其聲が此場合なんとなく嬉しく響いて、

「確りしなんしょ、よ」と爲るまゝになるお波を蒲團の中へ入れた。

襦袢を探さうと押入れをあけてみると、男手の届かぬ汚れものや、子供の着物などが轉げ出て、落ちかゝつた壁から砂がざら〜と落ちた。

伊助は切れさうな耳を押へてひた急ぎに急いだ。

間口の廣い旅籠屋の角に建つて居る素人義太夫と書いた角行燈の不景氣な灯を曲ると、ツ、ン〜と摘んだやうな三昧の音が、そこらの低い軒並を越して、靜まりかへつたあたりに響いてくる。

行火に古ぼけた赤毛布をかけて、跨灸^{かす}りをして居た禿頭の木戸番にことはつて、伊助は中へ入つた。まづ好奇と素見^{ものさ}半分に行つた人の頭のうよ〜してるのが目にはいる。舞臺には鈍帳芝居の御殿などに使ふ小屋を建て、びか〜と剝けた金襴、赤毛布を敷き廻した上に、淺黄の肩衣を着た人が二人並んで居る。膝を乗り出し〜、大きな手で合を入れて居る盲目の脇に、赤い房のついた見臺にのしかゝつて、口を曲げて枯れかゝうた聲をはりあげて居るのは、よく〜見るとそれが捨吉である。伊助は極りが悪いやうな氣がして暫くとほんと立つて居た。丁度もの賣りに入つて居る友達に會つたので、それに教

へられて地獄道から樂屋の方へ廻つた。燈^{あかり}もない眞つ暗な中を、何かに躓きながらびく〜もので傳はつて行くと、幽に燈の影がさして、ざら〜と足に砂の氣持ちのわるい舞臺裏へ出た。種々な道具が、道せまくたてかけられてあるかげの方に、鐵葉^{てつえつ}の火鉢にカン〜と火を起して、見しり越しの桶屋の爺や、二三人の若い男が頻りに何か話し合つて居た。

その中に交つて、伊助はもの珍らしさに暫く家のことを忘れた。

不意にばら〜な喝采が起つた。

「終へた〜」と一人が欠伸をして立ち上る。

「何時だもう、十時過ぎ? そんなになつかないア」

「ふ〜 御苦勞様」

「さア寄りたまへ〜」と一人は脇をあける。

捨吉はさも満足さうな顔してにこ〜寄つて來た。

「お父つさ」と脇から聲をかけると、初めて吃驚して、

「なんだ伊助」

「あつ母さが……」

捨吉は見る／＼興ざめた顔になつた。

「よし、今直ぐ行く」

肩衣を脱いで桶屋の爺に何か囁いて居たが、

「さア行へ」と絆纏の袷を直しながら出て來た。

「なんだ捨さん、もう歸んのか、そんぢやらあれ持つてつたらどうだ」と一人がわざ／＼起つて行つて小さな鯨の折を持つて來た。

裏口を出る時に拍子木の音がして、東西／＼と口上言ひが、太夫の名と藝題を觸れて居る。

「あゝ今度は朝顔日記だ」と捨吉は残り惜しさうに呟いた。

* * * * *

「伊助か？」

待ち切つたやうにおせいは首をのばした。

「んゝ」

「お父つさは——？」

「今來る、産婆家さ寄つたんだ」

がたびしと戸を閉めて、伊助はふう／＼言ひながら入つて來た。

「もう今度の汐時だと思ふんだげつとな。童どもゝやう／＼寝かしつけたし、お湯も大がい沸く頃だ、焚きつけがなくて困つたぞ」

「おせい」

お波は度々かうしておせいを呼んだ。

「あい／＼、氣を確り持ちなんしよよ、今にない、今アに直さに樂になつから」と子供をすかさやうにおせいはふん。

「捨さんは遅いことなア、伊助、汝ア御苦勞でも少つと手を貸してくつろやれ、なア疊を一枚剝かさぞなんねえから」

疊を剝いだあとの床へ、教へられた通りに伊助は藁や襦袢を敷いた。

刻一刻に、腰を抱いて居るおせいの手を、彈ねかへす程に力づいてくる。苦しまぎれに其手をむづと握つては「おせい」といふ。

力にされて見ると我ながら不安で心細く、萌すいろ／＼な縁起でもないことが、ふとお波は今年三十二の厄年なのを思ひ出した。

「おせい、捨さんはえ」

「捨さんかい、捨さんは今産婆をつれて直ぐに來るぞい」といひながら、そろ／＼本性がついて來たかと、おせいは涙がこぼれる程嬉しく思つた。

「おせい」

唸るあいま／＼には絶えずおせいを呼ぶ。

おせいはふと妙なことを思ひついて自分の髪に手をやつた。いつか姑が上方見物にのぼつた折、土産といつて江の島から買つて來た子安貝の根掛けがかゝつて居る。力を入れて其絲を切つて、

「姉さ、確りしなんしよ、もう少しの間だぞい」と一つづゝ兩方の手に握らせた。

「あゝ……むゝ……むゝ……」

夜汽車の軋りが早く地を曳いて去ると、二三軒先の犬が太い聲で吠え出した。しつしつと叱る聲がする。耳をすましてゐる間もなく、今度こそはと思つた足音が、つひまた行き過ぎてしまつた。